

重度・重複障害児の身体運動における意思伝達スキル向上に関する研究

加地 信幸^{*1}・河野 喬^{*2}

Improvement of body movement-related communication skills of children with severe and multiple disabilities

Nobuyuki KAJI・Takashi KAWANO

This paper discusses a practical approach involving support methodology for promoting body movements that make coordinated actions possible with a tutor's help. The results showed that to achieve this most effectively, the tutor needed to (1) use a humorous expression and tone of voice, (2) stay close to the child's face and continue to speak regularly, and (3) maintain physical contact.

Key Word (キーワード):

Movement of the Body (身体運動), Children with Severe and Multiple Disabilities (重度・重複障害児), Self-reliance activities (自立活動), Communication (コミュニケーション)

1. 目的

重度・重複障害児には、寝たきりや車椅子中心での生活のため、自らの意思に基づく運動がほとんど見られず、身体運動の不足に陥る者が少なくない。そのため、教育現場においては、指導者による身体運動の提供（他動運動）を通して、身体の適応能力を高め、心理的安定と身体の動きを広げ、運動量を確保することが期待される。重度・重複障害児を対象とした身体運動については、たとえ他動運動であったとしても筋骨格系や呼吸循環器系の機能保全や機能増進に寄与することが知られており（染谷, 2005; 佐竹, 2005）、指導の意義は大きい。

その一方で、指導の困難さが指摘できる。木村・安井（2015）によれば、重度・重複障害の場合は

身体部位間の身体活動量に差が顕著であることから、その複雑な障害像を理解した上で、受動的な身体活動を含めて、必要性や充足度を検討する必要があるとする。また、いかに配慮された指導であっても、児童が指導者を受け入れることができないければ意味を成さないため、意思伝達、関わり、コミュニケーションについても工夫が必要である。重度・重複障害児に対するコミュニケーションについて、多くの先行研究が蓄積されているが、実践的な関わり一つひとつの具体から有益で汎用性のある指導理論を立ち上げることが求められている（池田, 2015）。

本研究では、重度重複障害児が指導者の支援を受け入れ、共に活動できる身体運動を成立させるための支援方法における基礎的知見を得ることを目的としている。

^{*1} 重度・重複障害児スポ・レク活動教室「はなまるキッズ」代表

^{*2} 広島文化学園大学 社会情報学部

2. 方法

(1) 実施期間及び場所

1) 実施期間

平成20年4月16日～7月14日、9:15～10:00(実施期間中、概ね毎日実施)実施授業：自立活動

2) 場所

A特別支援学校(小学部3年教室、及びブレイルーム)

(2) 実践検証の手続き

児童Aの身体運動の活動を定期的にビデオで収録し、実践の振り返りを行った。特に、指導者の支援を受け入れ、共に活動できる身体運動に着目し、そこで確認できた事実に立脚し、分析・考察するとともに、それらを踏まえて児童Aに対する具体的なコミュニケーション支援法を提示した。

(3) 対象児童

本研究で対象とした児童Aは、A特別支援学校・小学部3年に在籍する男子である。上肢の活動は積極的で、SRCウォーカーによる歩行運動や、寝返りでのフロアー移動が可能な活発な児童である。快感情を笑顔や笑い声でしっかりと表現し、不快な感情は泣いたり声を出したりして表現できる力をもち備えた、感受性豊かな児童である。興味・関心のあることには集中して取り組める傾向にあり、特にボールを介した身体運動には興味・関心が高い。しかし、指導者から必要に応じて支援を受けた身体運動を拒む傾向にあり、自由に動きたい気持ちが優先され、身体を反り返らせて抵抗するケースが見られる。

3. 結果及び考察

(1) 身体運動の実際

1) 児童Aの指導の目標

年度当初、児童Aとのコミュニケーション関係が十分でない時、フロアー上でのストレッチ、身体運動、共に座り後方から上肢の支援を行う活動

等の実施を試みた。すると、児童Aは筆者からの支援に対して、反り返って抵抗することが多く見られた。そこで、児童Aとの間にどうしたらストレスのないコミュニケーションの関係が構築できるかを考えるようになり、児童Aの興味・関心の高い身体運動の指導にあたることとした。

指導の目標は、児童Aの課題として「興味・関心のある物を増やし、集中力を養う」「決められた活動において、指導者を受け入れて共に集中して取り組むことのできる力を獲得する」等を設定し、指導に当たった。これらの課題をクリアするために日々の活動では、①児童Aの多様な経験や人との関わりを深め、興味・関心のもてる活動を拡大し、同時に集中力を育てる、②決められた活動へ、指導者の支援を受け入れ、共に活動することができるよう支援する、の2点について取り組んだ。

2) 身体運動の具体的な支援と内容

実践を重ねていくうちに、児童Aが「指導者といると楽しい」と感じてもらうことで信頼関係づくりへとつなげ、楽しいことを提供してくれるという期待感と興味をもってもらうことが重要だと感じた。このような関係づくりを構築していくことで、指導者が意図する支援に対してそれを受け入れ、共に行動できるようになるのではないかと考えた。そこで、児童Aが「楽しい」と感じ、笑い声があり、笑顔でいられる新たな実践を探索することとした。なお、実践にあたっては、児童Aが喜びながら活動に集中できる時間を多様にもつように工夫した。

(2) サークルボール・コロコロ運動

1) 活動の選択理由

児童Aは、日頃の生活において、自らボールに触れ、落とし、転がす活動にはかなり積極的で、集中して活動することができる点が確認できた。また、児童Aの実態把握のための資料や日々の観察等から、ボールを介した身体運動が、児童Aにとってモチベーションを保ちやすい活動であることも確認できた。このような理由から、ボールを活用した活動を考案し、支援を試みることにした。

2) 活動の概要

ジャンボ感覚ボール(表面に突起があるボール)を活用した身体運動を主に試みた。具体的な方法は、あぐら座位で、一方の上肢はフロアーについて身体を支持し、もう一方の上肢でボールに触れるよう支援する。指導者は、後方から児童の骨盤が後傾しないようにすると共に、脊柱・頸椎を伸展位にキープするよう支援していく。この活動では、このような姿勢を保持しながら、ボールへ向かって主体的に上肢運動を中心とした身体運動を行うものである。

3) 活動の工夫とその効果

この活動は、ボールが遠くへ転がってしまうとその都度取りに行かなければならなかった点に問題があった。これは指導者が児童Aに密着して後方に位置し、支援を行っているため、指導者がボールを取りに行く動きは、せっかく児童が保持している姿勢を崩してしまい、活動が中断し、結果的に児童の集中力を欠いてしまうこととなった。そこで、指導者と児童Aを中心とした、半径1m程度にダンボール製の壁で円形をづくり、ボールが遠くへ転がらないよう工夫してみた。こうすることで、指導者と児童Aの周りの円形内でボールが転がるようになり、児童Aがボールに触れるチャンスが増し、活動が中断してしまうことがなくなった。

児童Aは、ボールが後方へ転がり見えなくなったら、その反対側から出てくることを予測し、ボールを追視・注視する動きが可能であることが確認された。その際、体幹部や骨盤の動きや、上肢で身体を支持してボールを触ろうとする動きが主体的に誘発されていた。この「主体的な動き」のタイミングに着目することで、児童Aの体幹の回旋や股関節・腰背部のストレッチ、上肢の支持性を高める腕支持感覚の学習等を同時に試みる事が可能となった。

また、児童Aは、この身体運動を通じて、ボールが転がる様子をよく注視・追視しながら声に出して笑ったり、笑顔を見せたりすることができる。さらに、児童Aの活動に対するモチベーションを保つために、指導者が声の調子を変えながら、

絶えず言葉をかけるようにした。例えば、ボールの動きに合わせて「あれー」「わー」等のおどけた声のトーンで言葉をかけたり、「3・2・1・あっちに行けー」とリズムよく言葉をかけてボールを後方へ転がしたりすることで、児童Aは声に出して笑いながら活動することができた。

4) 活動の結果

この活動での児童Aは、指導者の支援を受け入れ、共に楽しみながら身体運動を行うことが可能となった。また、運動・ストレッチには時間をかけて取り組めないことが課題であったが、指導を継続したことで、最大で30分程度は実施できるようになった。このことに加え、一定の指導者ではなく、他の指導者とも身体運動を楽しんで行うことができるようになった。

(3) SRCウォーカー・ボール転がし運動

1) 活動の選択・実施理由

児童Aは、日頃から生活の中でSRCウォーカーでの歩行に積極的に取り組んでおり、学校のみではなく、家庭でも室内や屋上をSRCウォーカーで歩行していることを保護者から確認した。このことにあわせて、ボールに興味・関心が高い点に着目し、SRCウォーカーを介した身体運動の支援を考案し試みることにした。

また、SRCウォーカーの乗車姿勢は、体幹部の伸展位がキープされやすく、やや前傾位姿勢のポジションにより、胸で体重を受けた姿勢となりやすいといった点でも有効であると考えた。さらには、両下肢交互運動を積極的に行う児童Aにとって、両股関節や膝の可動域運動へもつながっている。このように、乗車姿勢にも大変有効であると考えた。

2) 活動の概要

この活動は、児童AがSRCウォーカーに乗って、SRCウォーカーのテーブル上に置かれたソフトバレーボールを、両上肢を積極的に活用し、落とし、転がす活動である。また、このボール転がし運動は、プレイルーム等、比較的広いスペースで実施する。その実施場所までは、SRCウォーカーに乗って歩行運動をしながら移動する。児童

Aには移動前にソフトバレーボールを提示し、これから始まる活動の意識付けを行った後、ドリブルしたり、転がしたりしながら実施場所まで移動する。

3) 活動の工夫とその効果

具体的な支援では、児童Aが転がしたボールを、「おとっと」「こらー」「あれー」「待て待てー」等、ボールがテーブル上から転がり落ちる動きに合わせて、おどけた声のトーンで言葉を発するようにした。また、ボールを取りに行く動きには、オーバーに倒れたり、回転したりしながら児童Aの反応を確認し、楽しみを演出するよう工夫した。このような支援を行うことで、児童Aの楽しい気持ちを持続させつつ、上肢の主體的な動きを誘発させることをねらった。

また、ボールを扱う上肢の動きは左優位に働きやすいため、右上肢を積極的に動かすことができるように立ち位置を工夫してみた。児童Aの左側に立ち、「こっちだよ」と言葉をかけ、時々手拍子を行うことで、SRCウォーカーのテーブル上においたボールを、右手で左側へ押し出す動きが確認された。一方、児童Aの右側へ立つと、左上肢で比較的早く右側へ転がす動きが確認された。今後も学習が継続されることで、児童Aの目的的な上肢の動きが、確実にできるようになることに期待したい。

なお、しっかりと主體的な動きにより楽しんだ後には、児童Aの主體的な動きのみに任せるのではなく、正しい上肢の動きによるボール転がし運動も行うようにした。指導者による後方からの上肢のサポートを行ったが、それまで楽しく行っていたモチベーションを保ちながら、児童Aは指導者の支援を受け入れ、ボールが転がっていく方向を笑いながら注視し、共に楽しみながら活動することができた。

また、児童Aは、実施場所までの移動時に、指導者がドリブルしたり、転がしたりする動きにも興味・関心が高く、声を出して笑ったり、笑顔を見せたりしている。これらの支援は、児童Aにとってこれからはじまる活動への期待感も高まっているように感じた。

4) 活動の結果

実践を繰り返していくうちに、児童Aは、自らボールに触れ、落とし、転がす活動を楽しみ、集中して行えることが分かった。また、自らがボールを転がすことのみでなく、指導者がボールを取りに行く姿を見ることもさらに快感情を高めていることが分かった。また、サークルボール・コロコロ運動よりも、よりいっそう喜び、楽しむことができた。これは、指導者のおどけた声のトーンで発する言葉に合わせて、ボールが広い空間で転がっていく動きや、指導者がボールを追っかけていく動きを見ることができると、児童Aの快感情を高めた要因だと考えられる。

このような支援を行うことにより、児童Aは終始笑顔が途絶えることなく、笑い声もしっかりと出し続けることができたと同時に、活動へのモチベーションも保ち続けることができたと言えるのではないだろうか。

(4) ふれあい遊び運動

1) 活動の選択・実施理由

親密な身体の触れ合い、つまり「スキンシップ」とは、子供に対して身体的・心理的安心感を提供できるものである。親と乳幼児が身体を触れ合わせた戯れを通じて、遊びながら相互関係が親密になっていくプロセスがあるように、児童Aともこのような相互関係を構築していくことが必要ではないかと考えた。

児童Aは、学校生活場面で車椅子からフロア上、またはおむつ交換台上へ抱きかかえて空間移動する際に、声を出して笑い、喜ぶことが多い。また、児童Aはスクーターボード（4つの車輪のついた台車のようなもの）等の乗り物やトランポリンを好み、これらの大型遊具から得られる前庭感覚刺激を快刺激として受け止める傾向が強い。

このような児童Aの実態に着目し、スキンシップを前提とした、いろいろなバリエーションによる身体運動の支援を試みることにした。

2) 活動の概要

実施期間中、以下にあげるスキンシップによる身体運動を行った。

(A) ロケット打ち上げ運動

フロアに座った指導者の開脚した中に、子供は正座に近いポジションで指導者と向き合う形に位置する。指導者は子供の両脇をサポートし、子供の下肢へ過度な加重をかけすぎないようにする。「3・2・1」とロケット発射時のカウントダウンのように言葉をかけると同時に、そのリズムに合わせて子供をやや上下に動かし期待感を高める。「それー」の合図で、指導者は子供の骨盤に両足底を密着させ、同時に両手で子供の両脇をサポートし、そのまま空中へ飛び上がる。子供は斜め前方へ飛び上がる形となり、指導者の両上肢がフロアと直角位になったあたりで静止する。この静止状態から、左右に倒れたり、さらに前方へ向かったりして、動きにバリエーションをもたせる。ただし、この静止状態から左右・前方へ発展していく動きは、子供の体重を支える力がさらに必要となる。子供の重みに絶えられなくなり、コントロールできなくなると、指導者には十分な配慮が必要となる。

(B) 回転シーソー運動

子供の左側から横抱きにし、身体の接地面を可能な限り多く取るよう、しっかりと密着させる。指導者はそのままの姿勢で、右後方に倒れ、背面で左方向へ回転し、左前方へ起き上がり、はじめの横抱き姿勢に戻るといった回転系の動きを行う。なお、安全面への配慮も十分行わなければならない。回転する際には、子供の頭部がフロアで打ってしまわないよう、ヘッドのポジションを終始観察し、コントロールすることがポイントとなる。また、子供の上肢・下肢が回転運動と同時に指導者とフロアの間挟まったままで回転したり、無理な位置や角度になっているまま回転したりしないよう留意しなければならない。

(C) 回馬乗り運動

フロアに仰臥位になった指導者の骨盤上に、子供は開脚した状態で座る。指導者は子供の骨盤または両脇をサポートし、転倒・落下しないようにする。可能な限り、両上肢を伸展さ

せて指導者の胸部につき、子供がバランスを保持するようにする。指導者は、上下・左右に揺さぶる動きを行う。

(D) ごろごろ横転運動

仰臥位の指導者の上に、子供は腹臥位で乗る。子供は指導者の上を左右へ横転する。なお、横転運動の際には、安全面への配慮を要す。上肢・下肢の各関節が、無理な方向へ向いたり、過剰に屈曲したりしていないか十分留意し、可能な限り上肢・下肢は伸展位で横転するようにする。

3) 活動の工夫とその効果

上記の4つの活動においては、特に児童Aの表情を終始観察し、楽しめていることを確認しながら指導を行うよう工夫した。あわせて、「それー」「コロコロ」「わー」等、各運動の動きに合わせて、おどけた声のトーン等で言葉を発するようにした。

具体的な指導方法や工夫、留意点等については、概ね活動概要に記述したとおりである。上記の活動の中で、特に児童Aが楽しめた活動は、ロケット打ち上げ運動である。実践を繰り返していくうちに、児童Aは、「3・2・1」という言葉かけを始めた段階で、声を出して喜ぶようになった。この時、児童Aは正座に近い形で座位ポジションを取っているが、カウントダウンと共に若干子供を上下動させることで、膝や股関節の運動につなげるようにした。「それー」の合図で、上方へ飛び上がり空中で静止すると笑い声を出し楽しむことができた。

ここでの運動の指導では、児童Aが「楽しい」と感じ、笑い声があり、笑顔でいられる状態を、可能な限りキープするように支援したことがポイントである。つまり、子供の楽しんでいる様子を確認しながら、支援のスピード、言葉かけ、子供との動きづくりをコントロールするということがある。

今後、これらの「楽しい」と感じる活動を十分行った後に、仰臥位による運動・ストレッチを行うと、児童Aがよりスムーズに支援を受け入れた姿勢・態度で実施できることが期待できる。

4) 活動の結果

これらの活動,特にロケット打ち上げ運動では,児童Aが「楽しい」と感じ,笑い声を発し,支援を受け入れ共に活動することができた。児童Aが楽しんでいるということは,「もっとやりたい」「もっとやってもいいよ」と捉え直すことができる。ここでの児童Aは指導者と共に,身体運動を心から楽しむことができた。

児童Aは,指導を重ねていくうちに,フロア上等で指導者と共に,身体運動ができるようになった。また,他の指導者と共に活動している様子も確認できるようになった。このことから,一定の指導者のみを受け入れるのではなく,複数の指導者を受け入れる力が獲得されつつあると言ってもよいだろう。児童Aの新たな生活適応能力が拡大してきている可能性は高いことが伺える。スキンシップに基づいた身体運動の指導とは,児童Aが指導者を受け入れ,共に活動できる力の促進へとつながったことが言えるのではないだろうか。

4. 本研究の成果と課題

本研究では,はじめは一定の指導者が継続してかかわることで,子供に安心感をもってもらい,徐々に信頼関係を構築するようにした。一定の指導者との信頼関係が構築された後には,次第に他の指導者とも身体運動を行うようにした。実際の支援では,子供が身体運動しやすい姿勢サポートを心がけ,子供の好きな活動を取り上げたり,子供の好きな刺激を提供したりするようにした。その際,子供の主体的な動きを尊重し,見逃さないようにした。そのためには,常に子供の表情を見ながら主体性を引き出すように支援した。こうした支援は本研究の対象児童に限らず,全ての子供にかかわる際の重要な指導の基盤と考える。その上で,本研究において支援にあたる際の特徴的なポイントを3つに整理した。

児童Aが指導者の支援を受け入れ共に活動できる身体運動を成立させるためには,指導者側の①おどけた声のトーンと表情,②顔を近づけたテン

ポ良い声かけ,③スキンシップ,の3つの指導のポイントが有効であることが示唆された。これら3つの指導のポイントとは,①では,「わー」「きゃー」「おととと」「こらー」「待て待てー」等の音声言語を高いトーンで発しつつ,児童の期待感や興味を引き寄せた。そして指導者も「楽しい」と感じていることを伝えるために笑顔で指導を行った。②では,児童Aの顔の近くで「1・2・3・それー」等テンポよくリズムに乗せて行うよう指導しながら,身体を動かすタイミングを伝えた。③では,仰臥位,腹臥位で児童Aと向かい合わせて横になる,または横抱きにする,児童Aが馬乗りになる,ロケット打ち上げ運動等の際,しっかりと身体を密着させることで安心感をもってもらえるように指導した。つまり,児童Aが「楽しい」と感じる身体運動を演出するような指導者の関わり方が,児童Aが指導者を受け入れて,集中して共に活動できる時間を拡大する効果をもたせようとしていると言える。本研究で明らかにした3つの指導のポイントが,児童Aの指導には大変有効であり,快感情を引き出すことへ大きく貢献し,指導者の支援を受け入れ,共に身体運動を行うことを可能とすることができたと言える。

本研究を行ったことで,子供の「共に活動できる力」を引き出すのは「指導者の力・技術力」であるということを再認識する事ができた。その上で,本研究で明らかにした3つの指導のポイントをおさえた指導を行うことによって,単なる繰り返しの活動とは異なった,子供のやりたい気持ちを引き出し,快感情の獲得が実現できる活動を提供できると考える。そして,子供が「楽しい」と思える活動の場の提供は,活動のバリエーションを拡大していくことへとつながると考える。本研究で提示した3つの指導のポイントは,他の子供にも共通していると感じることが多い。今後も実践を重ね,より客観性を高めたい。

文 献

- 1) 染谷淳司, 2005, 療育的対応の実際－運動・姿勢維持の障害－姿勢維持・寝たきり対策, 重

- 症心身障害療育マニュアル第2版, 医歯薬出版, pp.71-74.
- 2) 佐竹孝之, 2005, 療育的対応の実際－運動・姿勢維持の障害－骨折の予防と治療, 重症心身障害療育マニュアル第2版, 医歯薬出版, pp.91-95.
- 3) 木村牧生・安井友康, 2015, 重症心身障害児(者)の身体運動を測定する試み: 複数の身体活動量系を用いて, 北海道教育大学紀要(教育科学編), 第66巻第1号, pp.11-22.
- 4) 池田吏志, 2015, 重度・重複障害児を対象とした関わりに関する教育研究の動向と課題, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第一部第64号, pp.29-38.
- 5) 川住隆一, 1994, 運動活動に基づく「関係あそび」を通しての重度・重複障害児と関わり手との相互交渉, 国立特殊教育総合研究所研究紀要(第21巻), pp.51-58.
- 6) 川住隆一, 1999, 生命活動の脆弱な重度・重複障害児への教育的対応に関する実践的研究, 風間書房.
- 7) 川住隆一ほか, 2004, 障害児の療育ハンドブック, 日本肢体不自由児協会.
- 8) 加地信幸, 2006, 養護学校における体育の教授－学習活動に関する研究－重度・重複障害児を中心に－, 県立広島女子大学大学院生活科学研究科人間福祉専攻修士論文.
- 9) 加地信幸ほか, 2007, みんなが輝く体育⑦障害児体育の授業, 創文企画.
- 10) 小林芳文・上原則子, 1992, 講座・重度重複障害児(者)の感覚運動指導①基礎・応用編, コレール社.
- 11) 小林芳文, 2001, LD児・ADHD児が蘇る身体運動, 大修館書店.
- 12) 矢部京之助・草野勝彦・中田英雄, 2004, アダプテッド・スポーツの科学, 市村出版.
- 13) 文部科学省, 1992, 肢体不自由児のコミュニケーション指導, 日本肢体不自由児協会.
- 14) 文部科学省, 2000, 盲学校, 聾学校及び養護学校学習指導要領(平成11年3月)解説－自立活動編－, 海文堂出版.
- 15) 文部科学省, 2000, 盲学校, 聾学校及び養護学校学習指導要領(平成11年3月)解説－総則等編－, 海文堂出版.